

# 安藤昌益の循環思想と自然概念

(2014年3月 湘南科学史懇話会での報告原稿)

## 〈目次〉

はじめに

- § 1 「四行」と「三回」による包括的循環思想
- § 2 三浦梅園・伊藤仁斎との大きな違い
- § 3 循環諸原理の設定
- § 4 昌益の自然概念：実在総体であり生生運動である
- § 5 漢字文化圏の自然概念の多義的展開：「自ずから然り」が総てではない
- § 6 「通横逆」自然運氣論の環境観を現代に活かす

### はじめに—安藤昌益研究は三国志時代(70-90年代)から群像の時代へ—

現在=21世紀初期の安藤昌益思想研究には二つの特徴点があると思われる。一つは昌益を環境思想家として捉える論考が圧倒的に多いこと。20世紀半ばまでは民主平等の先駆的社会思想家として評価していた事と対照的である。社会情勢の推移と共に研究上の関心・評価基準が変わるのはある程度やむを得ないが、長年昌益思想と取り組んできた立場からは、もっと内在的な研究のあり方が必要だと思われる。その観点で、本報告では昌益の環境思想・医学論・社会思想の共通基盤とも言える、彼の循環思想と自然概念について集中的に論じたい。

第二の現代的特徴は、寺尾五郎・安永寿延・三宅正彦といった人物に代表される1970年代半ば-1990年代(これを筆者は「三国志の時代」と呼んでいる)と違って、有力な研究者のいない“群像研究者の時代”になっているということ。21世紀に入って、新たに昌益医学関連或いは昌益医学の継承系譜関連の新史料が発見されたが(二種の「良中子神医天真」、「良中先生自然真営道方」「静谿謾筆」「静谿漫筆」など)、それらは皆、非職業的研究家の手によって発掘され解明された。大学で近世思想史などを専攻する職業的研究者の寄与は極めて僅かになり、民間の非職業的研究者の寄与が大変大きくなった。本報告も、そうした非職業的研究者である筆者が長年昌益思想と取り組んできた成果の一環として行うものである。

### § 1 「四行」と「三回」による包括的循環思想—概念装置の大変革・大拡張

#### 1.1) 陰陽五行を批判的に拡張改変

昌益は循環思想を構築するに当たって、伝統的な陰陽五行論では自然界や人体内の運動を十分に表現できないとして「進退五行」論を提起し、更に晩期には「進退四行」論に改作した。

- ①陰陽概念から尊卑観念を払拭し、陰と陽を対等な運動機能として「進退」に替え、
- ②五行の一行と他の四行を個別存在でなく共時存在的な顕在・伏在の関係と捉え直し、
- ③「土」は活力源・原物質としての「活真」の実体として「四行」を統括するものし、
- ④「進退」と「五行」の関係も「活真」が「進退」「大小」の運動をして「四行」(=木火金水)の環節ができるとして一元的に再編した。

これらのうち、特に②が昌益思想の際だった特徴点で、例えば「木」気には他の「火水金」の三気が共時的に伏在・内在しているという措定である。「四行」の各気は常に共在していて、一者と他者の関係は顕在と伏在の関係にある。

### 1.2) 通横逆も取り込み「四行」と併立統一

しかし、これだけではまだ、天地・万物・人身の運動を表現するにはなお不十分だとして、昌益は「三回」＝「通・横・逆」の巡回区分を「四行」と結合的に提起した。

⑤「通横逆」の巡回は「天・地・中央土」「人間・動物・植物」「声・音・韻」を生成し、

⑥「四行」と「三回」の巡回運動は共時共在して統一的行われる、とした。

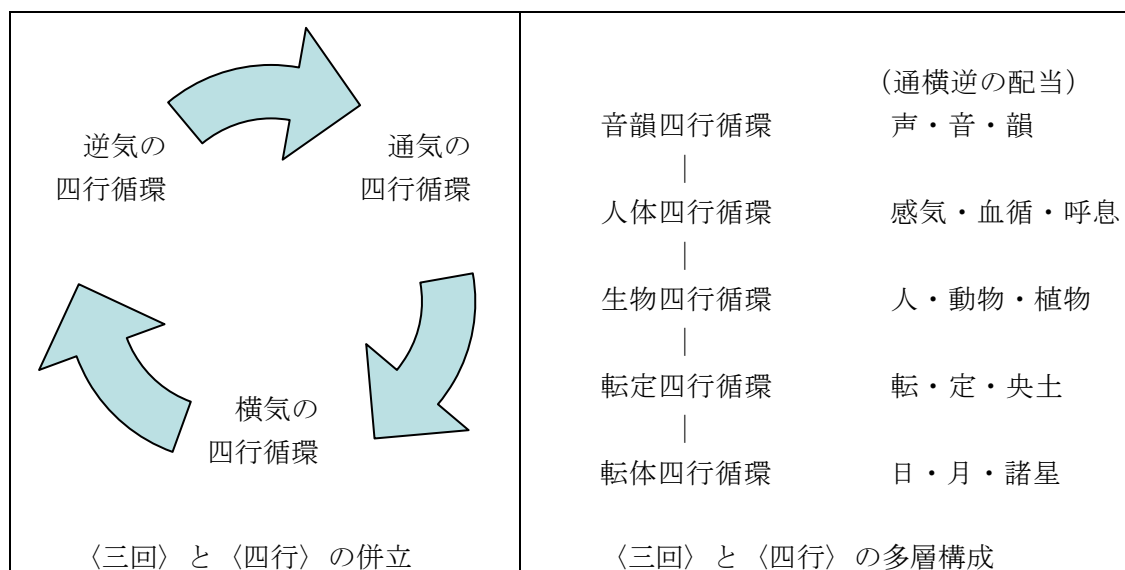
「通・横・逆」の原型概念は、例えば貝原益軒の「大和本草」などで人間・動物・植物の生存様態を「順生・横生・倒生」などと区分した事例に見られる。昌益はこのような単なる区分観念を天地・生物界・人体全般にわたる循環運動の環節として拡張して取り込んだと言えよう。

このようにして、昌益は天地・万物・人身の運動を、「四行」と「三回」という二系統の統合された循環様式において把握した。自然運氣論の伝統思考を受け継ぎながら、様々なレベルの運動を多層構造的に一つにまとめ上げようという意図が伺える。

### 1.3) 「互性」の「生生循環」＝悪循環との区別をつける

昌益の循環論は更に、「互性」と不可分な内容をなしている。「互性」は「進退」の拡張概念で、対等な二者の相互内包・相互依存・相互協調の統一関係を意味する。晩期の昌益に於いて成立した“和生的矛盾”概念であり、敵対関係を含まない。自然界を「万物生生」「生生無尽」の運動として把握する昌益は、楽天的なまでに「互性」を伴う循環運動が自然の本来の姿だと主張した。

しかし現実の自然界や社会には“悪循環”と呼ばれる事態が度々起きている。昌益もこの事を明確に意識し理解していたから「互性」の循環（以下では“生循環”と略記）と悪循環を区別している。昌益においても、環境破壊など自然への人為が不適切に為された場合（＝物質的悪循環）や人間社会で統治と争乱の続く階級社会の有様（社会的悪循環）、迷信を信じた為に陥る生活破壊（精神的悪循環）などが典型的な悪循環と見なされる。



## § 2 三浦梅園・伊藤仁斎と昌益の大きな違い

### 2.1) 梅園は五行を廃棄し陰陽改変だけで理論構築

三浦梅園は伝統的な陰陽五行論に対して、陰陽の継承と変革だけが天地万物の存在と運動の記述にとって有意であるとして、昌益と同様に陰と陽に同等の機能を措定したが、表現上は「陰陽」から「𠄎」（こごとへん）を除去して表示した。五行論については、五行相克・相生説に対する梅園の批判は主に『贅語』の「善悪帙下・仁義」や「陰陽帙下・五行第六」などで述べられている。批判の要点は、総論的には木火土金はいずれも民衆生活にとって不可欠な用具性を持つとは言え、「気」「物」の個別形態なのだから、森羅万象の一般的元基として取り上げるのは不適切だという。更に具体的には「相生」の木生火は火食木、「火生土」は木埋火、「土生金」は金鑿土、「金生水」は水壞金、「水生木」は木壅水が正しく、「相克」の「木克土」は土能腐木、「土克水」は水能流土、「水克火」は火能涸水、「火克金」は金亦隔火、「金克木」は木亦剋金が正しいと主張した。その結果、五行相生説・五行相克説いずれもが自然の現実を正しく把握していないとして、廃棄した。

五行説を廃棄したために、梅園の自然哲学は自然界の循環運動の過程・環節を把握する事よりも、総ての事物を双対概念の段階的系列で把握する、“二分枝”系列の展開図式として表現する独自性を生み出した。これは前節で見たように、五行説を拡張的に変容して用いる安藤昌益とは正反対の方向性であり、両者の自然論の著しい骨格的相違点である。

### 2.2) 昌益と梅園への狩野亨吉と三枝博音の対照的評価

〈狩野亨吉の場合〉：

「哲學的方面といはうか、日本では唯一の、又大なる哲學者とも云ふべき人がある。」

「日本の哲學者といふと誰も能く三浦梅軒(注・梅園が正しい)を擧げるが、自分の見る所では、梅軒などよりか、遙かに大規模で、哲學觀が深い、梅軒も自分が能く了解らぬからかも知れぬが、此ひとは梅軒などと比較すべきものでない。」

(「内外教育評論」第三号(明治41年)所載「大思想家あり」某文學博士) 上記の引用で「某文學博士」とは狩野亨吉のことであり、記者は三浦梅園を梅軒と誤記している。狩野は昌益を哲學者として紹介し、「互性活真」の世界觀と社会思想方面を中心に記者に語ったようである。この時点で狩野は、昌益が梅園と比較するのが不適切なほど、巨大な存在だと理解していたようだ。

〈三枝博音の場合〉：

「自然哲学の方法論的貢獻という意味では、梅園ははるかに昌益の上にあったと考えられる。私はかつて、三浦梅園はわが国における自然弁証法の萌芽としてもっとも注意を受けねばならぬことを書いたのであった(『弁証法談叢』参照)。(「日本の思想文化」)

「私がすでに屢々自然哲學者として挙げた安藤昌益は陰陽論から脱することができないでいる。三浦梅園は思想の範疇を考案することにおいて従来の如何なる思想家にも匹<sup>ひつちゆう</sup>儔を見出さないが、而も根本においては陰陽の理論を脱することはできなかった」(同上)

「昌益の『内経』に対する態度は学問的でないといわねばならない。学問一般に対する否定が根底にあるがためであって、学問の上からは暴論といわねばならない。」(同上) これらの引用で、昌益も梅園も陰陽論の枠組みから脱し得なかったという把握は一面論断であり、昌益が学問一般を否定しているという記述、内経医学批判が暴論だというのは、

今日では当たらない——三枝氏の昌益思想への理解は浅かったと云わざるを得ない。

### 2.3) 安藤昌益と伊藤仁斎の自然論の大差

伊藤仁斎も気一元論の立場で万物生生を説く唯気論思想家・生命思想家ではあるが、原著「語孟字義」や「古学先生文集」を検討した限りでは、昌益のような陰陽五行批判から始めて、新たに「四行」「三回」を定義し天地界・生物界・人体全般にわたって壮大な生生循環論を組み立てるような企ては見いだせない。伝統的な陰陽五行論を受け継ぎながらも、基本的観点において「天地の間は一元気のみ」であり、「天地生生化化」の運動に「自然の理」を認めた人士と言えよう。ここでは、その核心的主張だけを抽出する：

「けだし天地の間は一元気のみ。あるいは陰となり、あるいは陽となり、<sup>ふた</sup>両つの者ひたすらに両間に盈虚消長往来感応して、いまだかつて止息せず。これ即ち天道の全体、自然の気機、万化これより出でて品彙これに由って生まる。」（語孟字義・巻上）

「理有って後この気を生ずるにあらざること。いわゆる理とは、かえって是れ気中の条理のみ。それ万物は五行に本づく。五行は陰陽に本づく。」（同上）

「動静は、自然の理勢なり。太極は、然るゆえんの妙なり。この故に動静相乗じ、陰陽相生じ、ひとり勝つことあたわず、ひとり華縷々ことあたわず。これを天地の道とし、これを万物の本とす。」（古学先生文集・巻二）

仁斎の場合はこのような基本思想に留まっているが、昌益の場合は包括的な生生循環の理論を構築できたと言えよう。〈観〉と〈論〉或いは〈理論〉の差という事もできる。

## § 3 循環諸原理の設定

「四行」（＝木火金水）と「三回」（＝通横逆）という二系統の循環の併用という大枠を立てた昌益は、更に循環運動の諸原理を設定した。その主要内容を、ここでは五項目に集約して示したい。

### 3.1) 循環順序と非可逆性の原理

これは、「四行」・「三回」とも決まった順序で循環し、逆流はしないという原理設定である。具体的には、

①「四行」（「五行」）は木→火→（土）→金→水→・・・の順序で循環し、逆流はしない。

②「三回」は通→横→逆→通→・・・の順序で循環し、逆流はしない。

という内容である。「四行」（「五行」）の循環順序は伝統的な〈五行相生〉説の順序を踏襲した事が分かる。昌益は〈五行相生〉説・〈五行相克〉説のいずれもが現実にそぐわないと批判はしたが、循環順序に関する限りは前者を踏襲した。逆流しないという設定は、自然界の運動における非可逆な側面を直観的に感じ取った可能性もあろうかと思われる。

### 3.2) 巡回遅速と邪毒の発生原理

「三回」の運動では、まず単独論として本来的に、通気(人間)は速回して無毒、横気(動物)は滞留して微毒、逆気(植物)は凝固して少毒を持つとした。気の運動が順調に運行すれば邪毒は発生せず、停滞するほど邪毒を増す、という素朴視点である。

次に「三回」の運動で、同種の気（例えば横気）だけが重なると邪気になり、病気として作用するという。また通横逆の三気が互いに他気を受ける場合も邪気としてはたらき、病気をもたらすと昌益は主張している。

さらに人間は「通気」主宰の存在だが、人間性を喪失して獣業に走る事は「通気」の「横

氣」化に他ならず、邪氣を生む、と主張する。環境破壊も正常な循環を破壊するので邪毒の発生を招くという論法である。

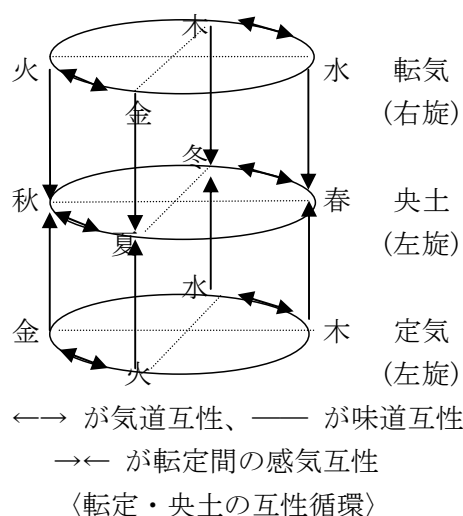
### 3.3) 「転・定」の逆回と交感原理

「転」の「四行」は右旋回、「定」と「央土」の「四行」は左旋回というように、昌益は天と地の「四行」の旋回が逆回りだとした。これは循環順序の原理と矛盾せずどちらの「四行」も木火金水の順に循環するという意味である。

「交感」とは「転」の「四行」と「定」の「四行」が「央土」において感応しあうことを指す。

右図を参照されたい。

この転定逆回・交感原理は小天地としての人体内でも行われるとして、昌益医学論の基礎を為す。



### 3.4) 「気道・味道」互性の原理

「進退」の一氣が「小大」の運動を行う事で、木(小進)・火(大進)・金(小退)・水(大退)の「四行」循環が成立する。その際に「進氣」と「退氣」の間に「互性」が成り立つのは、小と大、大と小の進退関係である(木-水)と(火-金)、

小と小、大と大の進退関係である(木-金)と(火-水)

の二系統が可能である。(木-水)と(火-金)は氣の運行経路上の互性なので「気道互性」と呼び、(木-金)と(火-水)は経路上、内在的に対向するので「味道互性」と呼んだ。

上図から分かるように、「気道互性」と「味道互性」は転の四行・定の四行いずれにも単独で成立するばかりで無く、両者がまた同時に成立している。その両者が「央土」上で[交感]する関係は(木-水)、(火-金)と対応しているから「気道互性」と同じである事が分かる。この二つの互性規定は昌益の医学論に於いて、極めて重要な基本原理である。

### 3.5) 抽出・復土の人為循環原理

最後に、自然循環と人為活動の好ましい関係のあり方についての、昌益の原理思考について触れておきたい。昌益は好ましい人為活動を、生存に必要な直接生産活動の持続を前提に、自然界の「妙序」(=万物生生の循環順序と全体秩序)を良く知ること、構成要素の均衡を崩さないこと、万物の能毒に通じること、資源から用材を抽出して使用後は必ず大地に戻すこと、を原則としている。分けても最後の命題は資源の、“抽出-加工-使用-廃材-復土”の人為循環の完結を主張するものであり、最も重要な原則であると同時に人為循環の原理でもある。自然界から有意な資源を見出し、抽出し加工して民生に不可欠な諸物品を造っても、消耗後は必ず大地に戻さねば、自然の大循環に叶った人為の小循環は成立しない。言い換えれば、近世の手工業社会における復土リサイクルの主張であり、動脈工業と静脈工業の並立の提起でもある。貨幣製造や奢侈品制作・軍備の類いは復土性のない非循環行為なので、当然批判・否定される。

## § 4 昌益の自然概念：実在総体であり生生運動である

### 4.1) 昌益は「自然」の語を名詞形と動詞形で両義的に使用

次の引例は「自然」を極端なまでに多様に読み替えた事例である。

「自然とは吾れ<sup>ひと</sup>自<sup>す</sup>り然るなり。ゆえに吾が<sup>す</sup>然る事には、自<sup>われとする</sup>然。 (中略) 自<sup>われとする</sup>と然るには自

と<sup>し</sup>然て成るなり。故に自然は始め無く終り無き<sup>つね</sup>自然、此の五行なり。」 (統・禽獸卷)

昌益はこのように「自然」を「しぜん」「ひとりする」「われとする」「われとして」「つね」などとルビを付けて読んでいるが、基本的には名詞形の「しぜん」と動詞形の「ひとりする」に集約できる。この点は、昌益の「活真」概念の場合も同様で、同じ用語を名詞形で「かつしん」と読むと同時に「いきてまこと」と形容動詞的に読む発想と共通している。昌益にとって、「自然」と「活真」とは実在・実体であると同時に自生・生生運動であり、両面が不即不離の一体概念として把握されている。実体と運動を対立的・択一的に見ているのではない。

### 4.2) “自然とは何か”と問い回答を与えている

- 「自然とは真の言なり」 → 自然＝真(根源実体)の存在概念
- 「自然の全体は無始無終の転定」 → 全自然＝天地の存在概念
- 「自然とは五行の尊号なり。」 → 自然＝五行(四行)の結節運動概念
- 「自然とは互性妙道の号なり」 → 自然＝和合的矛盾の運動法則概念
- 「自然とは自り然るを謂う」 → 自然＝自律自生の運動概念

これらの典例から分かるように、昌益の言う「自然」は何に注目して云うかで、多様に定義されているが、多元的だという事では無い。存在概念の側面では、天地万物の実在総体を指す場合もあれば、その根源実在の方を指す場合もある。と同時に、運動概念の側面では自律自生の運動自体を指す場合と、むしろその法則性を意味している場合とがある。しかし総体としては実在概念と運動概念が二元的に提起されているのでは無く、昌益にあつての「自然」は生生運動の総体が天地万物の姿でもある、という事になる。

### 4.3) 伝統的な「自然」語法との比較

このように、「自然」の語を名詞形・動詞形で用いる事から、昌益の場合は伝統的な“自ずから然る(り)”の形容詞・副詞用法がその分、少なくなる。しかし全く消えたと言いつてもない。次の引例は両者の混淆事例と云えよう。

「転定の全体は無始無終の自然なり。自然は五行の一神行なり。神行は自然の進退なり。

(中略) 耕農を為す人倫も、生ずる所の穀種も、自然の為る所なれば、自然に具はりて自然に耕し自然に織り、自り耕して・・・」 (刊・自然真営道 卷二)

この引例では前半の「自然」は主辞・主語であり名詞だが、後半の「自然に」は伝統的な副詞用法と見なしてもよい。

更に昌益の場合は、「自然」の語が他の熟語と連語的に連結された用法が多い事も特徴として挙げる事が出来る。「自然・活真」「自然・転定・活真の妙行」「自然・生生・直耕・転定の真道」といった用法である。この場合の「自然」は後に続く用語と合成的な意味あいを持つ事になる。その典型形として「自然活真」「自然互性」「自然転定」などを挙げる事ができよう。ここでは「自然活真」について、触れておきたい。

### 4.4) 「自然活真」＝根源・生動との複合概念

「自然活真」の用語は昌益の晩期の著作に良く出てくるが、その前身は中期までに確立し

た「自然真」の語である。昌益にとって、「自然」と「真」は彼の初期から既に結合した単体化概念だったとも言えよう。両者がそれほど密接不離の概念だった証左とも言える。このことは昌益が「自然」を単なる“自ずから然り”の無作為状態概念としてでなく、根源力・根源基としての「(活)真」の繰り拵げ一切の事物として見ていたということでもあり、中国思想史における「自然」＝「道之真」「気之根本」「究極」等の思考伝統の延長上にもあると言って良い。そして「(活)真」が現実世界から遊離した形而上学的概念に成るのを避けて、昌益は当初は「真」に実体性も意図して「土真」「中真」「本真」などと呼んでいたが、晩期になって「活真」の一語に統括し、特に実体性を強調する際は「土活真」と記述するようになった。

「活真」の営む諸相が即ち「自然」だとする連結概念は、現代的に云えば自然科学を物質科学の諸展開と不可分に見ていく自然観に相当するとも云えるのではないか。或いは、自然を根源的な存在物・動力因から構成論的に理解しようとする表象として「自然活真」の語が成立していると云えよう。

## § 5 漢字文化圏の自然概念の多義的展開：「自ずから然り」が総てではない

### ——魏晉時代から自然＝天地万物の語義が生まれた——

近代以前の漢字文化圏では、「自然」の語義に今日の“自然界”を意味する天地万物の概念はなかったとする見解が支配的だが、正しくない。ここではその根拠となる用例を実際に示しておこう。

#### 5.1) 自然＝根源的存在・生成原理としての語義

- |                            |                |
|----------------------------|----------------|
| 「自然者、道德之常、天地之綱也。」          | (道蔵・宗玄先生玄綱論)   |
| 「自然者、道之真也。人為道能自然者、故道可得而通。」 | (道蔵・無上秘要・入自然品) |
| 「自然者、道之父母、気之根本也。」          | (雲笈七籤・元炁論)     |
| 「自然者、重玄之極道也。」              | (成玄英：道德經義疏)    |
| 「自然者、無称之言、究極之辞也。」          | (王弼：老子注)       |
| 「自然者、無為而成、因縁者、積行之証。」       | (釈道宣：廣弘明集・卷九)  |

これらの文例では「自然」の語義として「天地の綱」「道の真」「気の根本」「無称・究極」「無為成」などと多様に用いている。根源的存在や生成原理の意味に用いているわけで、「自然」が「自ずから然り」の無作為状態概念から名詞として変容したことが確認される。

#### 5.2) 自然＝天地万物としての語義

- |                              |               |
|------------------------------|---------------|
| 「天地、含気之自然也。」                 | (論衡・談天)       |
| 「天地生於自然、萬物生於天地。自然者無外、故天地名焉。」 | (達莊論)         |
| 「自然生太極、太極生天地、天地生陰陽、陰陽生萬物。」   | (道蔵・道德真經義)    |
| 「天者自然之分、命者究達之数也。」            | (道蔵・冲虚至德真經四解) |
| 「天者、自然之称也。運者、転之不息也。」         | (道蔵・南華邈・天運篇)  |
| 「自然者天地、主持者人。」                | (周易外伝・卷二)     |

このように、「自然」の語が名詞として天地・天地万物・天と等置された用法があることが分かる。王充の「論衡」からの事例は、同書の中では珍しい事例だが、天地＝自然と解釈できる。魏晉時代の阮籍の「達莊論」あたりから、こうした事例が他の用法と未分化ながら見られるようになり、明清時代に到るまで、頻度としては少ないながらも確認されるのである。そして先に見たように近世日本において、安藤昌益は明確に「自然」の語義に

天地万物の实在総体も含めて用いている。ここでは紙数制約上、紹介できないが、山鹿素行、伊藤仁斎、西川如見なども（昌益ほど明確ではないものの）「天地自然」の語意として天地の自然性と共に天地＝自然と解しうる記述をしている。要するに、漢字文化圏においては近代の“自然界”の語義に通じるような「自然」の用法が他の語義と未分化ながら既に形成されていたという事である。

### 5.3) 三枝博音氏の「自然」把握

ところが、三枝博音氏は1958年の時点で、次のように論じている。

「日本の学問史のうえでは（中略）「自然」なることばは仏教者（「自然」）からも、儒者（「自然」）からも、折衷学者（「自然」）からも随筆家たち（「自然」）からも、梅園 や昌益のような独特の自然哲学者（「自<sup>おのずか</sup>ら然らしむる」または「自<sup>ひと</sup>りする」）からも、ひとしくこの語は使用されたのであるが、それにもかかわらず、彼らが天地や万物を指すときにあたっては、ついに「自然」ということばを使うことはなかった。」

（「自然」という呼び名の歴史）

三枝氏はこうした見解を上記の論考以外にも『日本の思想文化』や『西歐化日本の研究』などの著書で述べているが、今日の研究水準からすると漠然とした把握に留まっている。しかしこうした見解は同氏に限らず、現在まで多くの論者によって肯定的に受け継がれてきた。だが今や昌益の自然概念と中国での事例を見てきたとおり、このような理解が誤りである事ははっきりした。

### 5.4) 中国文学者の自然概念把握から

小尾郊一氏は著書『中国文学に現れた自然と自然観』（1962）で次のように述べている。

「中国でも、いつの頃か明確には判断はできないけれども、自然と人間のあいだに、何ほどかの区別を生じてきた。たとえば陳の江総の「修心」の賦には（中略）「自然の雅趣を保ち、人間の荒雑を鄙しむ」と述べている。「人間」に対して「自然」というところをみると、この「自然」は自然界、自然物のごとき意味を思わせるものがある。このように人間界と区別されるようになったのは、（中略）老荘思想の盛行した、また隱遁思想の流行したこの魏晉の頃であろうかと推測される。笠原仲二氏も既に「中国古代における自然概念とその内容の展開について」（『立命館文学』八四・八五号）という、詳細な論文を発表されて自然界、自然現象としての自然概念の成立を魏晉の時代と見ておられるのは、甚だ妥当な説とおもわれる。」（同書48頁）

ここに引用されている笠原氏の論考は1952年に発表された。従って1950年代から1960年代にかけて、漢字文化圏の自然思想に関しては、三枝博音氏とは明確に異なった見解が既に中国文学史の分野から出されていたのである。学問分野が違うから、討論されることも無かったのであろうか。

## § 6 「通横逆」自然運氣論の環境観を現代に活かす

### ——「天体—地球—大地」階層連結思考の重要性——

（1）最後に、安藤昌益の当該思想が現代にどの程度役立つのか、或いは有意性があるのかについて言及しておきたい。この件に関して、筆者はすでに2011年に「安藤昌益の自然観と現代的意義」という論考で論じたことがある。重複は避けたいので、関心のある方は



直接参照いただければ幸いです。

通常、昌益の自然観・自然概念を積極的に評価する向きは、鉱山開発・資源濫用を糾弾した記述や人間と動物・植物の不可分な生態循環的記述、山里・平里・海里の地域協業論などを中心に取り上げるのが常態である。その事には異論は無いが、ここで論じてきた昌益の循環論の思考からすると、まだごく一面だけの議論であり全面的な評価になりきっていない。むしろ、個々の環境破壊への昌益の認識が観念的だなどと批判する環境論者もいる。これは昌益の生循環思想と自然概念を原理的レベルにまで掘り下げず理解せずに直接の環境論的記述だけを抽出して、その不備を批判するだけのプラグマチックで皮相な議論というほかない。

(2) そこで一つの事例として、ここでは昌益の「三回」＝「通横逆」自然運氣論による、「転・定・央土」論の積極性について現代的に考察したい。これは意識すれば“天体－地球－大地”の階層連結認識である。昌益は日本に地動説が入る前の南蛮学的天体認識（＝つまり地球体説だけの段階）を自己流に改作して天地観を組み立てた。しかし自然運氣論の近世思考で、転体－地球－大地の階層連結思考を確固として持ち得た事は、素朴とは言え、むしろ現代人よりも増しだったのではないか。

(3) 現代人は自然界が大規模宇宙－銀河団－銀河－太陽系－地球といった階層構造を為していることを常識として持っている。しかし地球環境と天体现象を切り離しがちで、階層「連結」思考は極めて稀薄である。科学技術への過度の信頼のゆえに、地球環境の保全は好ましくない人為的環境要因を規制し減らせば、それだけで実現保持できるかのように思いがちである。だが現実には、地球環境は大気圏と海洋の相互作用、地震火山活動に加えて人為要因だけで出来上がっているわけでは無い。最近では太陽光放射だけでなく太陽フレアの影響や銀河系宇宙線が地球大気圏に達して雲量生成に影響を及ぼす機構までが研究対象になり、「宇宙気候学」という学問が誕生した。これは現代科学における階層連結思考の典例であろう。すなわち、地球環境は地表の環境要因と人為要因だけで無く、天体的環境要因も多層的に作用して形成されるという観点である。昨年9月に発表されたIPCC第5次報告の第I部（自然科学的根拠）は相変わらず、こうした観点が欠落しているように見受けられるのである。

(4) 昌益のような近世自然観はそれ自体としては、現代にそのまま通用するものではないが、その基本思考の中にはこうした有意性も備わっている面がある、と指摘してこの小文を擱く。  
(2014年2月)

〈補足的参考文献〉

東條榮喜：『安藤昌益の自然思想 増補改訂版』（2009）；樹心舎

東條榮喜：安藤昌益の自然観と現代的意義；伊藤 誠・本山美彦編『世界と日本の政治経済の混迷』（2011）pp.258－265；御茶の水書房

東條榮喜：『互性循環世界像の成立－安藤昌益の全思想環系－』（2011）；御茶の水書房

東條榮喜：漢字文化圏と安藤昌益の自然概念（1）（2）；「互生共環」No.39(2013) pp.2-9；No.40(2013) pp.2-12